坂口安吾「町内の二天才」論

金井雅弥

はじめに

坂口安吾「町内の二天才」[1]は、一九五三年一二月発行の『キング』に掲載された。安吾は将棋の観戦記や将棋を題材とした小説などを書き残しており、将棋に関係する作品が数多く存在する。近年では、二〇一八年に中央公論新社から安吾の将棋と囲碁に関する作品のアンソロジーである『勝負師』[2]が刊行されている。しかし、「町内の二天才」は、将棋が題材となっているのにもかかわらず、このアンソロジーに収録されていない。また、奥野健男が「つまらない」[3]と述べるように先行研究での評価は芳しくなく、これまでほとんど注目されてこなかった。

本作は、親バカ同士のちっぽけな意地の張り合いが繰り広げられる小説である。東京近郊の地方に住む魚屋の金サンには長助という中学二年生の息子がおり、床屋の源サンには一四歳の正吉という息子がいる。長助は野球、正吉は将棋で、親バカ二人は自身の息子を天才といって譲らない。金サンは源サンを負かすため、天元堂という易者に頼み、メメズ小僧という子どもを連れてきて、正吉と勝負させる。勝負の日、あいにく長助の少年野球の準々決勝と重なり金サンはそちらを見に行く。相手は県下第一と評判の投手が率いるチームであった。結果は、手も足も出ずに敗れ、金サンは言葉を失う。目がさめた金サンが正吉の対決が行われていた会場にいくと、すでに誰もいない。会場にいた女中に話を聞くと、二時間足らずで勝負がついたそう。正吉も手も足も出ずに敗れたのである。親バカ二人は「バカな夢を見たものだ」と現実を突きつけられ、物語は終わりを迎える。

鈴木雄史が「息子たちが豆天才などではないことははじめから分かり切っている」[4]というように、本作で登場する「天才」たちはどこにでもいるような子どもたちである。しかし、「親バカ」二人の力の入れようは異常であり、そこがまた滑稽で笑いを誘う。「バカな夢を見たものだ」と最終的に、父親二人が「天下の広大」さを実感して終わる本作は、当時の市井の風俗や「親バカ」の憎めない様子が素朴に描かれているといえるだろう。

安吾と深くかかわる将棋と野球が題材になっているが、数少ない先行研究でもそれらについて深く掘り下げられているものはない。そこで、本稿では、題材とされている将棋と野球に注目しつつ、「天才」をめぐる新しい時代の到来がいかに表現されているかを分析したい。

一　豆天才

「町内の二天才」は初出当時、「諷刺小説」というジャンルを掲げて発表された。何が「諷刺」されているかと言えば、「親の熱」すなわち、「親バカ」さである。作中では自身の子どもを「豆天才」としてもてはやす親たちの様子が次のように語られている。

> 当節は日本中に豆天才がハンランしているようである。目の色を変えているのは親だけだ。そのほかの誰も天才だとは思わない。むろんそれで月謝を稼いでいる先生も。ヴァイオリンの天才。バレーの天才。歌謡曲の豆天才。どれといって親の熱に変りはないが、特に熱病がハデに露出しているのは野球なぞかも知れない。（傍点引用者）

「当節は日本中に豆天才がハンランしているようである」と言われるように、当時、世間では〈豆天才ブーム〉があった。関井光男は「昭和二十七年から昭和二十八年にかけては、実際に数多くのさまざまな豆天才が輩出した時期である」[5]と指摘しているが、そのブームはもう少し早い一九五〇年頃から見られる。小さい子どもを「豆」という言葉とともに「天才」ともてはやす現象自体は、すでに一九三七年八月発行の『婦女界』で掲載された「天才豆芸術家を訪ねて」や一九三八年八月発行の同誌に掲載された「評判豆天才の親子訪問」などで確認できる。その後、「豆天才」という子どもをもてはやす熱が高まるのが一九五〇年代に入ってからであり、「豆天才」の言葉が頻出するようになる。事の発端は幼い子どもらが画廊で個人展[6]を行い、それをジャーナリズムが囃し立てたことによる。一九五〇年四月の『婦人朝日』では「〝豆画伯〟といわれる子供の絵」という題で特集が組まれている。そこでは、幼い子どもが個展を開いた際に、「無批判なジャーナリズム」が「豆画伯」「天才少年」と囃し立てたために、多くの人々がその会場に訪れたということが言われている。また、「話題になった子供の絵」というページでは「本誌はこの風潮に頗る危険なものを認めた」として子どもの絵を囃し立てる風潮を問題視している。他にも、画家であった石井柏亭は「近ごろ豆天才だといつ

て児童の絵を騒ぎ立てる傾向があるが、周囲が変にもてはやして騒ぎ立てたりちやほやしたりするのは良くない」と一九五〇年五月発行の『徳島文化』に掲載された「子供の絵」でその風潮に否定的な態度を示し、美術評論家の久保貞次郎は「児童美術教育」を述べる際の枕として、「最近ジャァナリズムが「豆天才」の見出しで騒いでいるようだ」と一九五一年二月発行の『みづゑ』に掲載された「児童美術のために」で当時の様子に言及している。さらには〈豆天才ブーム〉を加味してか、一九五二年一月の『旬刊読売　新年特別号』では「豆天才ニコニコ座談会」、一九五二年七月の『新映画』では「天才豆スタアが語る　小さい身体に大きな望み」というように座談会が組まれている。こうした〈豆天才ブーム〉で取り上げられていた「豆天才」らは、もっぱら美術芸術分野で活躍する親を持つ子どもたちであった。

将棋についても「豆天才」の言葉の使用を確認できる。一九四九年一〇月の『将棋評論』では「天才豆初段」という見出しで当時一四歳だった少年が取り上げられている。また、一九五四年一一月の『近代将棋』には「読者会議」という欄があり、そこでは「豆天才棋士」という見出しで当時七歳だった子どもが紹介されている。野球の分野でも、一九五〇年一一月五日の『読売新聞』の夕刊で「〝打撃はこうして〟豆選手に球豪の先生」と「天才」という語は伴わないものの、「豆」と形容する使用例が確認できる。

このような〈豆天才ブーム〉があった一方で、その風潮を皮肉る立場の文章も同時に見られた。安吾の知人も度々そのような文章を発表している。自身も将棋を指していた徳川夢声は一九五〇年一一月発行の『漫画』に掲載された「親馬鹿・豆天才」で、「碁や、将棋の世界」は「勝負がついて、ハッキリ優劣が定まる」ために周りが騒いでも「豆天才になれない」としながらも、子どもたちにとって「豆天才」とおだてること自体が当人のためにならないと、度をこした「親バカ」を痛烈に批判している。夢声はこれよりも三か月前の同年七月の『面白倶楽部』で企画された読者に川柳を募集するコーナーで選者をしている。お題は「『ものは附』＝やめたいものは＝」というものであり、秀作に「豆天才の続出」というものがある。「豆天才」を好ましく思わない風潮を夢声は敏感に察していた。また、先にも触れた「豆天才ニコニコ座談会」を傍聴し、同誌面上で「傍聴傍見の記」を書いた近藤日出造は、「豆天才ばかり集まって大座談会を開くからこれを傍聴し、この豆につながってまかり越す親々の親馬鹿ぶりなどを中心にして、一文をものせェという」と、そもそも座談会自体が親馬鹿の実態を描くために企画されたものであったことを語っている。

「町内の二天才」が「諷刺小説」というジャンルを掲げて掲載されたのは、こうした親馬鹿を皮肉る風潮の影響を受けたものであるだろう。安吾は一九四八年一二月の『月刊読売』で獅子文六とともに夢声と「今年を顧みる」という鼎談し、一九五〇年八月発行の『中央公論』で掲載された「〝歌笑〟文化」で夢声のことを高く評価していた。また、近藤とも面識があり、近藤が編者をしていた雑誌である『漫画』の一九四八年一二月号に安吾は「哀れなトンマ先生」を書いており、一九五三年三月一九日の『西日本新聞』の夕刊に掲載された「明日は天気になれ（77）文士の碁将棋」では「二三年前まで近藤日出造君の編輯による『漫画』という雑誌があった」と回想している。さらには、一九五五年一月の『週刊読売』の「やァこんにちわ」では対談をしていた。

以上のように、〈豆天才ブーム〉で取り上げられる子どもらはもっぱら美術芸術分野で活躍した子どもたちで、彼らの多くが、親がその分野で活躍している二世であった。このような中でなぜ「町内の二天才」では将棋や野球に目が向けられていたのだろうか。

二　野球

「町内の二天才」では、「特に熱病がハデに露出しているのは野球なぞかも知れない」と野球が「親バカ」の格好の例として登場する。金サンと長助は「職業野球の花形選手」を目指して特訓しているわけだが、実際には、野球は当時どのような状況にあったのだろうか。

戦前、野球は学生野球が人気を博していた。職業野球も存在はしていたがそれほど人気を集めていなかったようである。しかし、戦後は職業野球が注目を浴びるようになった。谷川建司は「ＧＨＱ／ＳＣＡＰと日本プロ野球界の二人三脚による努力」により、職業野球は「戦後日本の空前の野球人気の中でメインストリームへと押し上げられた」[7]と、戦後に職業野球が人気になった背景を明らかにしている。また、戦前から庶民の間でも野球は盛んで、村上浩介は、「戦前から、一般の人々が娯楽としてする野球、すなわち草野球は、かなり盛んで」あり、戦後にはさらに高まったということを述べている[8]。また村上は、一九四六年には「文科省もＧＨＱの意向を汲んで、全国の学校にバットとボールを普及させ、野球を奨励した」と、戦後に「義務教育と野球は密接に結びついた」ことを指摘している。作中で長助が「中学二年生」とされていることは、時代背

景が反映され、野球が当時の子どもたちにとってありふれたものであったことを示唆するものであろう。安吾も一九五四年五月二〇日の『読売新聞』に掲載された「いつも大投手がいない町――桐生通信――」で「小学校や中学校の野球でもポンポンよく打ってビックリするほどだ」と桐生の子どもたちが野球をする姿を書き記している。また、作中で野球の「天才」とされる長助は「職業野球の花形」になるものとして金サンから期待されており、子どもたちの憧れの職業として野球は存在していたことがわかる。

こうした戦前から戦後にかけて変化していった野球の実態を安吾は同時代人として書き記していた。安吾は一九四八年の『世界日報』に掲載された「ヤミ論語」[9]の「大衆は正直」で職業野球について言及している。

> 職業野球が大衆の興味をあつめはじめている。大衆は正直である。時代の嗜好がスポーツへ動くわけではない。職業野球の内容が充実したから、大衆の興味があつまるのである。

職業野球の「内容が充実したから」こそ「大衆の興味」が集まり、人気になっているとその理由を安吾は語っている。同様の記述は一九四九年五月二九日の『毎日新聞』大阪版に掲載された「碁にも名人戦つくれ」にも確認できる。

> 大衆は正直なものだ、プロ野球に人気がでたのも実力が向上し、監督がブン殴り合つたりするほど試合というものに精魂をこめ選手権をめざして必死の力闘をするからである。

プロ野球の「実力が向上し」、「精魂をこめ選手権をめざして必死の力闘」がなされるからこそ、大衆の人気が出たと安吾はいう。また、一九四九年一一月発行の『文藝春秋』に発表された「戦後新人論」では、以下のように語られている。

> 戦後派の人気者の一つに職業野球がある。戦前に野球の主流であつた六大学も甲子園大会も都市対抗も、今では、プロ野球の新人発掘の温床として注目される程度となつてゐる。

ここではそれまで人気を博していた「六大学も甲子園大会も都市対抗」よりも職業野球が戦後に注目されていたことが語られている。

だが、安吾は職業野球については批判的であった。一九四八年八月発行の『ベースボール・マガジン』に掲載された「日本野球はプロに非ず」では、安吾の職業野球に対する考えが述べ

られている。

六月十日、大井廣介にムリムタイにひつぱりだされて、後楽園へでかけた。終戦後はじめての野球見物である。（中略）

だいたい、日本の職業野球には、まだ本当の職業精神もなく、組織もできてゐない。なによりも上達、それには、なによりも練習で、まづ練習の完全な組織をもたねばならぬ。（中略）

日本の野球のカントクは、この悲しい選手に絶望もせず、愚かにも、神を怖れぬ迷蒙を信じてゐるのです。どこに近代がありますか。どこに、職業人の血肉をかけた研究と、向上心と、工夫がありますか。（中略）

日本の投手はダメだ。職業人ならば、職業人らしい投手にならねばならぬ。職業人とは何か。

全力をつくし、イノチをかけ、死をかけることである。（中略）

碁、将棋でも、角力でも、プロには、必死の修業があるものである。日本のプロ野球は、まだ、とても、プロとは申されぬ。プロの修業精神を持たないからだ。

安吾は一九四八年六月一〇日に大井廣介と後楽園球場へ「終戦後はじめて」野球を見に行ったようである。職業野球に対して「本当の職業精神もなく、組織もできてゐない」といい、職業野球を「職業人」という観点から批判的に見ていることがわかる。安吾のいう「職業人」とは「全力をつくし、イノチをかけ、死をかけること」であり、自身の一生をかけてそれを行うことが「職業人」としてのあるべき姿であった。こうした安吾の職業観が一九四七年一一月発行の『文学界』に発表された「娯楽奉仕の心構へ」にも確認できることが、時野谷ゆり[10]によってすでに指摘されている。「娯楽奉仕の心構へ」では以下のように語られている。

文学の生命は何か。悩める魂の友だといふ。それも亦休養娯楽だ、と私は思ふ。人々の休養娯楽に奉仕するだけでも立派な仕事ではないか。棋士は将棋によつて、職業野球家は野球によつて寄席芸人は落語漫才によつて人々の休養娯楽に奉仕する。まことに立派な、誇るべき仕事ぢやないか。よき棋譜により、よき野球により、よき演芸によつて人に負けない好サービスをなし人々をより多くたのしませるために心を配り技をみがき努力する。意義ある生活ではないか。

安吾は「人々の休養娯楽に奉仕する」ことが、「まことに立派な、誇るべき仕事」であるとし、「好サービスをなし人々をより多くたのしませるために心を配り技をみがき努力する」こ

とこそが重要であると述べている。こうした「休養娯楽に奉仕する」職業人に、職業野球は成り得ていなかったと言えるだろう。また、時野谷は「「職業人」と言う時、プロ野球選手もプロ棋士もプロの文学者も同じ位相に置かれている」と指摘しており、「職業人」という観点からみれば、「血肉をかけた研究と、向上心と、工夫」をしない職業野球は「プロ」と呼べるものではないということが「日本野球はプロに非ず」では述べられている。

他にも一九四九年六月発行の『文学界』に掲載された「神経衰弱的野球美学論」で安吾は野球に対して次のような批判をしている。

夕方の四時頃になると、太陽が三塁から左翼を低く直射するやうになる。すると、三塁と左翼がポロポロと失策をやりだす。一九四八年はアロハシャツと色メガネの大流行時代であつたが、アロハユニホームはよろしくないが、色メガネは用ひた方がよろしいだろう。あの時間の太陽の直射が分りきつてゐるのに何らの用意もなく、ポロポロと凡フライを落つことすのは、野球でオマンマを食ふ人間の心掛けではないやうである。

安吾は一九四九年二月から東大病院神経科へ入院[11]していた。この入院中に安吾は科長の内村祐之に勧められ、後楽園に野球を見物に行っていた。そこでの野球観戦の感想である。野球選手らは太陽がまぶしくプレーに支障をきたすのがわかっているにもかかわらず、その対策をしていなかったようである。そんな姿を安吾は「野球でオマンマを食ふ人間の心掛けではないやうである」と批判をしている。

また、安吾は職業野球を批判しながらも、職業野球というものが戦後に成立したことやそうした考えが新しいということを述べている。一九四九年一一月発行の『近代文学』に掲載された「スポーツ・文学・政治」には、以下のことが語られている。

別府星野組の荒巻といふ投手、あいつは非常な秀才なんださうで、学校を首席で出て、職業野球に入らないで東大に入りたい気持があるといふので、東大野球部の連中がぜひ引つぱるやうに内村さんのところへたのみに来たんだ。すると、内村さんは、どうせ東大を卒業しても職業野球に入り、野球で飯を食ふべき人なんだから、三年無駄にしないで、今すぐ野球に入つた方がいゝ、と答へたんだ。かうした考へ方なんか終戦までなかつたんだ。実に新鮮な思想だよ。

当時注目されていた学生投手の荒巻淳に対して、精神科医で

ある内村祐之が「どうせ東大を卒業しても職業野球に入り、野球で飯を食ふべき人なんだから、三年無駄にしないで、今すぐ野球に入つた方がいゝ」と言ったエピソードを記している。それに対して安吾は「かうした考へ方なんか終戦までなかつたんだ。実に新鮮な思想だよ」と職業野球が一つの職業として成り立つようになったことを語っている。同様のエピソードは、先にも触れた「戦後新人論」でも記されている。内村祐之に師事していた春原千秋は東大病院神経科に勤めていた際に、内村と安吾が「愉快そうに野球談議を交わしたりしていた」[12]と回想している。

また、安吾は野球見物がつまらないものであるということを繰り返し語っていた。一九五〇年一月発行の『文藝春秋』に掲載された「麻薬・自殺・宗教」では「私は野球を自分で遊ぶことは楽しいが、見るのは、そんなに好きでない。（中略）面白くても面白くなくても、かまわない。流行をたのしむ精神である」といい、一九五三年四月四日の『西日本新聞』の夕刊に掲載された「明日は天気になれ（92）高校野球」では「私は野球を見物するのはあまり好きではない。巨人軍程度ならまアまアであるが、だいたい日本のプロ野球はプロにしてはヘタすぎるから、見ていても楽しくない」と、職業野球がつまらないということ語っている。

以上のように、安吾は職業野球について繰り返し言及していた。戦後に職業野球は職業として成立はしたものの、安吾にいわせれば「プロ」ではなく、「全力をつくし、イノチをかけ、死をかける」という「職業人」として失格だと捉えられていたことがわかる。だからこそ、野球見物はつまらないものであったのだろう。

三　将棋

野球は職業野球が戦後に興隆していたが、将棋は当時どのようなものであったか。将棋は戦前、新聞やラジオを通して人気を博す。戦争により将棋は一時衰退するが、木村義雄をはじめとした棋士らの奮闘もあり、徐々に人気を取り戻していった。増川宏一は将棋が「アメリカ文化と異質であったが、さほど占領政策の影響をうけなかった」とし、「戦前に強固な人気と愛好者層が確立していたので、戦後に関係者の多大の努力によって、再建が速やかにおこなわれた」[13]と戦時中、戦後の将棋について言及している。先にも触れた「ヤミ論語」[14]で安吾は職業野球が大衆の人気を「あつめはじめている」としながら、「職業野球の内容が充実したから、大衆の興味があつまるのである。将棋がそうだ」と将棋がすでに大衆の人気を獲得し

ていることを語っていた。また、一九四九年五月二九日の『毎日新聞』大阪版に掲載された「碁にも名人戦つくれ」では、「将棋の人気はいうまでもなく実力第一人者を争う名人戦の人気である。（中略）実力だけで争う勝負というものは残酷きわまるものである。その激しさ、必死の力闘が人気を生むのである」と、その人気の理由を安吾は語っている。一九四九年一一月発行の『文藝春秋』に発表された「戦後新人論」では「将棋界が全員とみに活気を呈した如く、漫画界も全員活気を呈した点で戦後の華々しいもの、一つであると云へよう」と戦後に漫画が興隆したことを示すものとして引き合いに将棋が持ち出されている。

野球が庶民の間で親しまれていたことは先に見たが、同様に将棋も庶民にとって親しまれたものであった。「町内の二天才」の作中では縁台将棋が登場するが、それは庶民の将棋文化を象徴するものであろう。戦争で一時途切れたものの「全国各地で夕涼みの縁台将棋も再び始まった」[15]と戦後も親しまれていた。また、安吾も「私自身は、むしろ囲碁にいさゝかのタシナミがあり、将棋の方は縁台将棋のビリに列るのがやうやくである」[16]と縁台将棋を指していたことを語っている。安吾にとって将棋は身近にあるものであった。

先にも参照した「日本野球はプロに非ず」では、「職業人」とは「全力をつくし、イノチをかけ、死をかける」ものであることが語られ、「碁、将棋でも、角力でも、プロには、必死の修業があるものである」と将棋がそうした職業の一つであることがいわれていた。将棋を「全力をつくし、イノチをかけ、死をかける」職業とする安吾の職業観は他の文章でも語られている。一九四七年八月の『群像』に掲載された「散る日本」では、以下のように語られている。

> 名人にとつては将棋は遊びではない筈で、わが生命をさゝげ、一生を賭けた道ではないか。常に勝負のギリギリを指し、ぬきさしならぬ絶対のコマを指す故、芸術たりうる。文学も同じこと、空虚な文字をあやつつて単に字面をとゝのへたり、心にもない時局的な迎合をする、芸術たりうる筈はない。

将棋が「わが生命をさゝげ、一生を賭けた道」であり、だからこそ「芸術たりうる」という安吾の将棋観が表れている。

以上のように、将棋が戦後になっても人々に人気であったことや親しまれていたことがわかる。そして、将棋は安吾の中で文学と同じように命をかけた職業であった。

四　ロマンとしての野球と将棋

人々に親しまれた野球と将棋だが、「町内の二天才」ではそれらをめぐる親の空回りが滑稽に描かれている。金サンは長助を教育するとき、「野球というものを全然自分でしたことがない人」であるため、「人の講釈の耳学問」や「書物雑誌」、「東西の戦記や理論」で情報を取り入れている。そして、「アメリカの大投手の伝記」を参照し、息子をランニングにつれていく。この伝記とは当時流行ったベーブ・ルースについてのものである。一九四七年から一九四九年にかけてベーブ・ルースに関連する書物が数多く出版[17]されていた。一九四八年八月にベーブ・ルースは亡くなっており、そのことも拍車をかけたのだろう。安吾も一九四九年一一月発行の『近代文学』に掲載された「スポーツ・文学・政治」で「あのときベーブルースを見たが、スケールが大きい、一流の俳優だね。一芸に達するとは恐ろしいことだ。とにかく全力を出しきつてゐる」とベーブ・ルースを高く評価している。自分の息子を育てるために、自分の経験ではなく他人に頼るというブッキッシュな金サンの姿は、より滑稽味が感じられる部分であろう。

一方、息子を将棋の名人にしたい源サンも同様である。源サンは「紋付」を「新調」して将棋大会に出かけていく。いかにも仰々しい姿である。そして、金サンも源サンも勝負の日には、セビロ着て行くのであるが、そうした態度が結末の息子たちがあっけなく負けてしまうことをより際立たせている。

こうした空回りした「親バカ」二人は息子に自分らの夢を仮託しているが、当の子どもたちはどこか他人事である。長助は「存分に野球がたのしめて、学問なぞはできなくとも親の文句は食わないから、これぐらい結構なことはない」と喜んで特訓をしており、また、正吉は「午まで遊んでくると云って、でかけましたよ」とメメズ小僧との勝負前に遊びに行ってしまう。一生や命をかけるほど熱が入っているわけではなく、「職業人」として到底なりえない姿に夢を見ている「親バカ」二人の姿も「諷刺小説」とされた理由にもなっているだろう。

このように「親バカ」二人の空回りが描かれているが、彼らは子どもたちに夢を見ている。そこにはある種の欲望が見てとれる。それは現時点の階層から抜け出すという成り上がりの欲望である。加えて、それは、自身の欲望を子どもに押し付けるという屈折した欲望である。

本作で、金サンは魚屋、源サンは床屋である。一九五〇代前半では、彼らのような自営業者層は人口の過半数を超えていた。後にこうした階層は徐々に減っていき労働者階級が増えていく[18]。戦後、日本では教育改革により小中学校の九年間が義

務教育となったり、新制大学が発足されたりと変化があった。しかし、当時の成り上がりとは、「学歴社会や立身出世物語を背景にした受験社会」での「社会的上昇移動」[19]であり、「受験をとりまく社会的コンテクストや受験の世界」は「戦前とほとんど変わらないもの」[20]であった。「町内の二天才」では、子どもたちが中学校に通うものの、「お前は小学校の時から算術ができなかったなァ」という金サンの発言から、源サンが算術に難があることがわかる。また、源サンを馬鹿にする金サンも「指で字をかいて」ようやく計算ができるという始末である。そして、金サンは息子である長助に日々野球の特訓をさせるが「学問なぞはできなくとも親の文句は食わないから、これぐらい結構なことはない」と勉強を強いていない。このように学問とは縁遠い金サンと源サンは、学問とは別の成り上がりの方法として将棋と野球に夢を見ているのではないか。それは、「どうせ東大を卒業しても職業野球に入り、野球で飯を食ふべき人なんだから、三年無駄にしないで、今すぐ野球に入つた方がいゝ」（「スポーツ・文学・政治」）という考えが戦後にでてきたと安吾が語っていたことと同様なことであろう。また、将棋でいえば、無学無盲で貧乏であった阪田三吉が戦後に織田作之助「可能性の文学」[21]をきっかけとし、北條秀司の戯曲『王将』[22]などによって広く認知されていた[23]。阪田がここまで人々の注目を集めたのは、そこに才さえあれば庶民でも成り上がれるかもしれないというロマンを多く人々が見ていたからではないか。そして、野球や将棋にそうしたロマンを見出すのは、それらが庶民の間で親しまれており、費用もさほどかからず誰でもできるものとして身近にあったからである。〈豆天才ブーム〉で取り上げられていた子どもたちは、ヴァイオリンや絵画といった費用の掛かる分野で活躍し、親もその分野の専門家であるという子どもたちであった。親しみがあり誰でもできる将棋や野球は、父親たちに学問ではない別の成り上がりの方法として捉えられていたのである。

五　戦前における「天才」と「町内の二天才」の「天才」

「町内の二天才」では「豆天才」に焦点が当てられていた。安吾は戦前期にも「天才」について書いている。一九三五年二月発行の『東洋大学新聞』に掲載された「天才になりそこなつた男の話」[24]では、「天才」についてのエピソードが語られている。この話は、登場人物である「私」がまだ東洋大学の学生だった時に事故に遭い、そのことを詩人の菱山修三がうらやましがるというものである。菱山がいうには「天才」とは「一列一体にその母親が不注意で、幼年時代に乳母車をひつくり返して頭

を石に叩きつけるといふやうなことを例外なしにやつてゐるものだ」というもので、事故にあった「私」を菱山は「天才」と祝福する。そんな菱山も事故に遭い、前頭部を強打し全治一ヵ月の重傷を負う。菱山は自身もこれで「天才」になれると思うのだが、医者からそのようなことはないといわれ、悲しみにくれる。はげます医者の忠告に共鳴し、菱山は退院し物語は閉じられる。

ここで描かれる「天才」とは、事故に遭ってでもなりたいものだが、実際に事故にあってもなることはできないという、深い羨望と絶望を伴ったものであろう。こうした「天才」と「町内の二天才」で描かれている「天才」の間には、決して小さくはない差異がある。「町内の二天才」では「親バカ」二人の夢にやぶれた姿に滑稽さを読み取れることに対して、「天才になりそこなつた男の話」の菱山の姿には、「天才」になりそこなった彼の悲しみが読み取れる。なぜこのような差異が生まれているのか。

「天才になりそこなつた男の話」の前年である一九三四年一〇月発行の『世紀』で発表された太宰治「彼は昔の彼ならず」にも、「天才」が出てくる。主人公の「僕」は木下青扇という男に家を貸す。青扇は「自由天才流書道教授」という肩書を持っていたが、一向に家賃を払わない。後に、この肩書も嘘であるとわかるのだが、彼はただの無職であった。しかし、「僕」はこの青扇に「無性格は天才の特質だ」というようになぜか「天才」を見ている。

「彼は昔の彼ならず」で描かれている「天才」は、時代状況が深く関係している。川崎和啓は「無性格」の背景として、儒教倫理をはじめ、大正教養主義や自然主義、それを否定克服するマルクス主義でさえも通用せず、「依拠すべき思想も倫理も存在しな」い時代になっていたこと[25]を指摘する。こうしたどのような価値観にも身をゆだねることができなかった「若い知性に普遍的に存在する精神の空洞と自己喪失の哀しみ」を太宰は青扇という「無性格」者を造型すること」で「示したかった」と川崎は論じている。「無性格を余儀なくされていることへの強い時代的不安感」が、「天才」の不可能性を通して表現された作品だということである。

また、安藤宏は「天才」という語は「「青年」たちの自己実現をいささかエキセントリックに表象する」高山樗牛のキーワードであったとしながら、「彼は昔の彼ならず」が書かれた時期には「「天才」の時代は終わっている」[26]と、近代の「青年」像がもはや成り立たなくなっていることを指摘している。安藤はその理由を「学歴のデフレ化」や「就職難」、「「大衆」社会の勃興などによってインテリゲンチャの役割が著しく変質」し

たからだと述べる。

このように「彼は昔の彼ならず」で描かれる「天才」とは、何にもすがることができない「青年」に「天才」を見出そうとするが、その「天才」そのものがすでに成り立たないという時代の閉塞感に裏打ちされたアイロニカルな「天才」だったといえよう。

こうした「天才」をめぐる閉塞感を同時代に生きた安吾も共有していた。「天才になりそこなつた男の話」の菱山は「天才」へ強い羨望を感じている。頭を石にたたきつけたとしても「天才」になれるわけがないのだが、菱山は本気でそうすれば「天才」になれると考えている。菱山の「天才」になれないことに絶望している姿は、医者に宣告されたときのことを回顧したときでさえ「声涙ともにくだる底の身も世もあらぬものだつた」という。このように「天才になりそこなつた男の話」に表現されているのは、何もすがるものがないがゆえに信じがたいことを信じることで妄想的に「天才」になろうとする姿である。このような幻想を抱くのは、「彼は昔の彼ならず」で描かれていたように「天才」が成り立たなくなっているという時代の閉塞感があったからに他ならない。

このような「天才になりそこなつた男の話」と「町内の二天才」のそれぞれの「天才」を見比べてみると、「町内の二天才」の「天才」がいかに楽天的な「天才」であるかを理解できる。「町内の二天才」の「天才」は特訓や努力をすればなれるかもしれないと庶民に夢を与えるものであり、かりにその夢が叶わないものであるとわかったとしても、「親バカ」として笑いとばせるようなものである。こうした「天才」は「天才になりそこなつた男の話」の悲壮な「天才」とは異なり、将棋や野球といった親しみのあるものによって庶民の子どもらが憧れて目指すことができ、皮肉ることができる「天才」であった。

「町内の二天才」は「諷刺小説」というジャンルを掲げて発表された。息子を天才として扱う二人の「親バカ」を諷刺したものであったが、諷刺できること自体が「天才になりそこなつた男の話」の「天才」とは大きく異なり、庶民が「天才」への憧れを身近なものとして持てる時代になったということを示しているのである。

1　坂口安吾「町内の二天才」（『キング』一九五三年一二月）。本稿で示した本文引用はすべてこれによる。
2　坂口安吾『勝負師――将棋・囲碁作品集』（中央公論新社、二〇一八年四月）
3　奥野健男「解説」（『定本　坂口安吾全集　第六巻』冬樹社、一九七〇年八月）
4　鈴木雄史「町内の二天才」（『坂口安吾事典〔作品編〕』至文堂、二〇〇一年九月）
5　関井光男「解題」（『定本　坂口安吾全集　第六巻』冬樹社、一九七〇年八月）
6　西田紘（当時六歳）と矢野目清彦（当時四歳）の二人が個人展をやり、注目をあつめた。西田紘の父である西田信一（「作品の真価を世に問う」『婦人朝日』一九五〇年四月）によれば、展覧会は一九五〇年一月に行われ、それについて「豆天才」や「豆ピカソ」という言葉が使われはじめ、ジャーナリズム上で話題になったという。
7　谷川建司「野球の復興と日米関係」（『ベースボールと日本占領』京都大学学術出版会、二〇二一年一月）
8　村上浩介「野球」（『戦後日本の大衆文化』昭和堂、二〇〇〇年五月）
9　坂口安吾「ヤミ論語」（『世界日報』一九四八年二月二三日～七月一二日）。初出未見。引用は坂口安吾『坂口安吾全集　第六巻』（筑摩書房、一九九八年七月）による。
10　時野谷ゆり「解題」（坂口安吾研究会編『坂口安吾論集Ⅱ　安吾からの挑戦状』ゆまに書房、二〇〇四年一一月）
11　七北数人『評伝　坂口安吾　魂の事件簿』（集英社、二〇〇二年六月）
12　春原千秋「坂口安吾　観戦記にみる厳しい勝負観」（『将棋を愛した文豪たち』メディカル　カルチュア、一九九四年三月）
13　増川宏一「むすびにかえて」（『ものと人間の文化史　二三―Ⅱ・将棋　Ⅱ』法政大学出版局、一九八五年一一月）
14　注9に同じ。
15　増川宏一「戦後の復興から未来へ」（『将棋の歴史』平凡社、二〇一三年二月）
16　生前未発表原稿：坂口安吾「後記」（『坂口安吾全集　第一五巻』筑摩書房、一九九九年一〇月）。文章の最後には「一九四九・八・一六」と記されている。
17　久保田高行「ホームラン王ベーブ・ルース」（『少年野球読本』日米文化社、一九四七年一〇月）や鈴木惣太郎「本塁打王　ベーブ・ルース」（『米国野球巨人伝』好文堂、一九四八年七月）、沢田謙『ベーブ・ルース』（偕成社、一九四九年四月）など、ベーブ・ルースについて書かれたものが数多く出版されている。
18　星埜惇「「高度成長」と社会構造の変化」（『岩波講座　日本歴史　二三　現代二』岩波書店、一九九七年五月）
19　竹内洋『立身出世主義［増補版］――近代日本のロマンと欲望』（世界思想社、二〇〇五年三月）
20　竹内洋『立志・苦学・出世』（講談社、一九九一年二月）は、受験現象を「心性史の視点」から、「受験時代Ⅰ」（明治三〇年代半ばから昭和四〇年代）と「受験の時代Ⅱ」（昭和四〇年代から現代）とに区別し、「昭和四〇年ころまでは戦前とほとんど断絶がない」としている。

21 織田作之助「可能性の文学」（『改造』一九四六年一二月）
22 新国劇『王将』（脚本：北條秀司、主演：辰巳柳太郎、有楽座、一九四七年六月公演）
23 阪田三吉と織田作之助「可能性の文学」、北條秀司『王将』の関係については酒井隆史「王将――阪田三吉と「ディープサウス」の誕生」（『通天閣　新・日本資本主義発達史』青土社、二〇一一年二月）に詳しい。
24 坂口安吾「天才になりそこなつた男の話」（『東洋大学新聞』一九三五年二月）。ただし、初出未見。引用は、『坂口安吾全集　第一巻』筑摩書房、一九九九年五月）による。
25 川崎和啓「「彼は昔の彼ならず」の作品的意味――太宰治と自我喪失の不安」（『国文学攷』一九九〇年九月）
26 安藤宏「コラム一九　「彼は昔の彼ならず」」（『太宰治論』東京大学出版会、二〇二一年二月）

［明治大学大学院国際日本学研究科博士前期課程］